

〔特産熱帯果樹等の安定生産技術の開発〕

小笠原の気候を活かした有望作目の生育・果実特性の把握

～ジャボチカバの生育・果実特性～

宗 芳光・岡崎正規*・佐藤澄仁*²・近藤 健³・河野 章⁴

(小笠原農セ・*東京農工大) *²現営農研修所・*³現西多摩普セ・*⁴現園芸技術科

【要 約】 ジャボチカバの大葉系品種を鉄骨ハウスで栽培すると結実開始から4年連続で収量が増加し、2010年は11.51kg/樹であった。収穫盛期は春季および秋季であるが、1年を通して出荷でき、小笠原村の特産農産物として有望である。

【目 的】

小笠原村を訪れる観光客に向け、年間を通じた熱帯果樹の供給体制の確立が求められている。そこで、本試験は主力農産物の端境期に出荷でき、生食だけでなくジャムなどの加工原料としても期待されるジャボチカバ（フトモモ科）の生育および果実特性を把握し、小笠原村における特産農産物としての適性を評価する。

【方 法】

2000年に購入した大葉系品種の苗5株を亜熱帯農業センター内の鉄骨ハウスに株間2m、条間2mで2004年10月14日に定植した。基肥で堆肥を5kg/株、N-P₂O₅-K₂Oを成分量で各々0.2kg/株を施用した。追肥は3、9月に成分量でN-P₂O₅-K₂Oを15kg/10a施用した。混み合った新梢の剪定を適宜行った。生育調査は樹高および地際部直径を計測した。収量調査は毎週行い、樹ごとに収穫果数と果重を計り、2007～2008年に行った果重分布調査は1果ずつの重量を計った。糖度および酸度分析は収穫盛期の果実を用いて収穫直後に行った。

【成果の概要】

1. 生育：樹高は定植時に213cmであったが、2010年には4mを超えた（表1）。
2. 収穫果数：2006年に結実を開始してから4年連続で増加し、2010年は2201果/樹で最大となり、2011年には2103果/樹となった（表2）。
3. 平均果重：結実開始の翌年の2007年以降は5g前後で推移し、経年変化はみられなかった（表2）。季節変化は夏季に低下し、冬季および春季に増加する傾向がみられた（図1）。2007年7、9月、2008年9月の収穫果は3.0～3.9gが最も多く、2007年2、11月、2008年3月では5.0～5.9gが最も多く、重い傾向がみられた（図2）。
4. 収量：2006年に結実を開始してから4年連続で増加し、2010年では11.51kg/樹で最大であったが、2011年は減少し、10.23kg/樹となった（表2）。収量は秋季および春季に多く、夏季が少ない傾向がみられたが、2009年以降は毎月収穫ができた（図1）。
5. 糖度および酸度：糖度は14～18Brix%で、酸度は0.4～0.55g/100mLで季節変化および経年変化はみられなかった（図3）。
6. まとめ：平均果重は冬季および春季に増加、夏季に低下する季節変化をしたが、結実開始5年間の経年変化はみられなかった。収量は結実開始から4年連続して増加した。また、結実開始3年目以降は毎月収穫できることから、1年を通して出荷が可能である。

表1 ジャボチカバ大葉系品種の樹高および地際部直径の推移

調査項目	検体数	2004年10月	2007年12月	2010年8月
樹高(cm)	5	213	354	Over ^a
地際部直径(cm)	5	4.4	6.1	7.3

a) 鉄骨ハウスの天井(400cm)に主枝がかかり、測定不能。

表2 ジャボチカバ大葉系品種の収穫特性の推移

調査項目	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
年間収穫果数	740±215	1524±266	1879±552	2201±213	2103±213
年平均果重(g)	4.8±0.4	5.2±0.4	5.4±0.5	5.2±0.2	4.9±0.3
年間収量(kg/樹)	3.56±0.93	7.84±1.15	10.22±3.16	11.51±1.03	10.23±1.33

a) 表中の±は標準偏差。

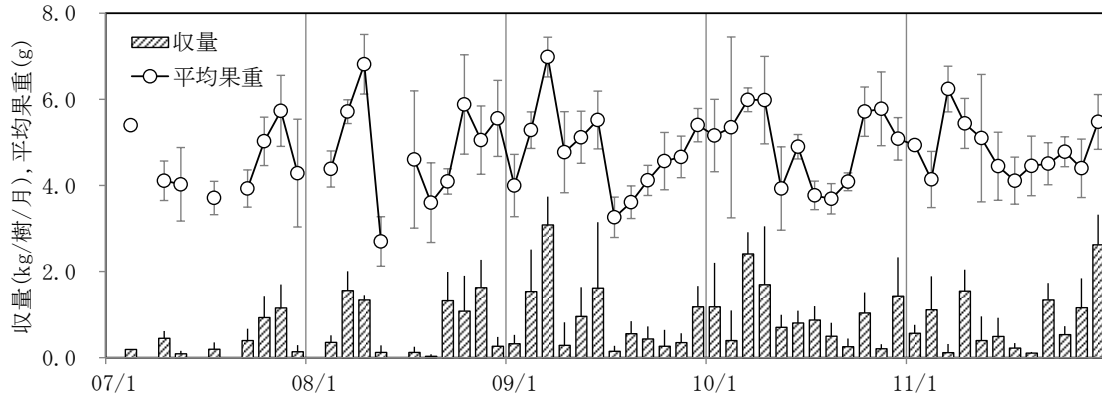


図1 ジャボチカバ大葉系品種の月ごとの収量および平均果重の推移

a) 図中のバーは標準偏差。

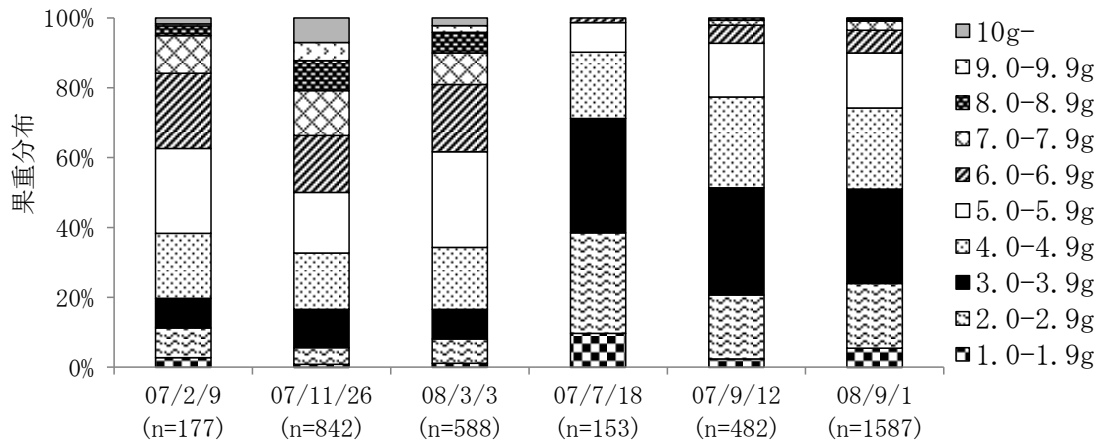


図2 ジャボチカバ大葉系品種の収穫果の果重分布

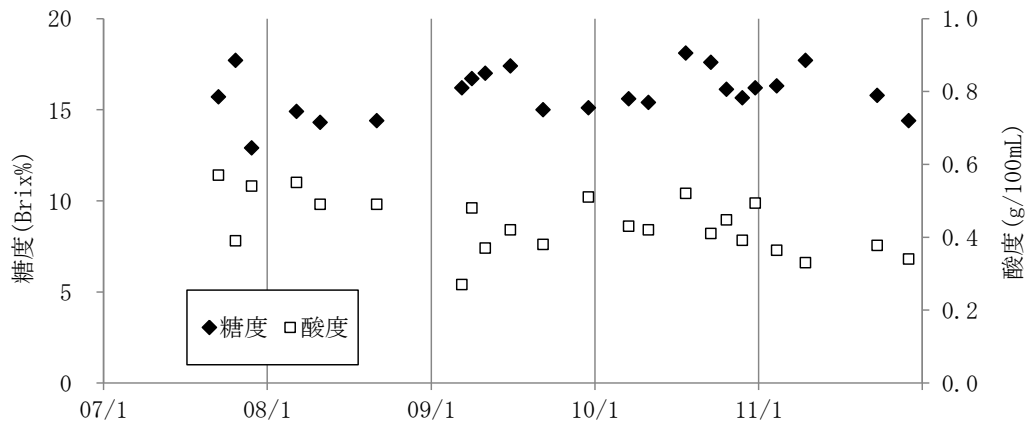


図3 ジャボチカバ大葉系品種の糖度および酸度の推移